◇原爆文学研究会一〇年――これまでとこれから

これまでを振り返って

波潟　剛

原爆文学研究会にはそれなりに参加してきましたが、発表とコメンテーターを各一回行い、書評を一本投稿したきりです。

二〇〇六年四月に九大に就職し、本会事務局を引き継ぐことになりましたが、『原爆文学研究』のバックナンバーを保管することと、問い合わせや郵便物を中野事務局長に転送することしかしていませんでした。何ともお粗末な話です。今年から事務局を福大の中野研究室に移転して、ようやく事務手続きが円滑に進むようになったのではないかと思います。これまで会員のみなさまにはご迷惑をおかけいたしました。

会の活動で印象に残っているのは二〇〇五年九月に開催された公開シンポジウムです。この原稿を書くためにあらためて『原爆文学研究』増刊号を読みました。確認できたのは、自分の問題として考えてみたい課題があるように感じたものの、六年が経過しても相変わらず未着手の状態であること。裏方としても会員としても中途半端なまま、ここまで来ました。

現在は韓国ソウルにいます。日本から持参した本のなかにスーザン・ソンタグの『隠喩としての病　エイズとその隠喩』（先述のシンポで言及されています）と『他者の苦痛へのまなざし』があります。日本を発つ前に実家のある茨城県日立市に行き、震災後半年を経てもさまざまな傷跡が残る風景を目にしてきました。そのときに感じたことを、震災直後に韓国にいてニュースの映像から感じたこと、あるいは福岡で、電話を通して、あるいは被災した家族や地元の友人から聞いたこと、また各種メディアの震災後報道を通して感じたことなどと合わせて、もう一度考え直してみたいと思って選びました。

しっかり、じっくり考えていけば、自分と原爆文学研究との接点をあらためて発見できるような気がします。